

‘All the World’s a Stage’ 考

—英語教育における authenticity をめぐって—

足立 和美*

はじめに

教室内に様々な教育機器が導入されて久しい。最近では、その最たる例はコンピュータとそれを駆使した教育であろう。英語の授業も例外ではない。鳥取大学を見ても、学生諸君は今年度からノート・パソコンが必携となり、英語の授業の一部で本格的に CALL が使われている。

このような授業を担当し、授業の初めから終わりまでただひたすらパソコンのスクリーンをのぞき込んで英語を学習している学生を見るにつけ、果たして生身の英語教師の役割とは何かを考えさせられる。コンピュータなどを使った語学教育は、これからますます多用されることが予想される (cf. 『英語教育』(1996) Vol. 45 No. 10)。すると、この生身の教師が教室内という stage で果たさなければならない役割とは何かについて考えることは、全ての英語教師が突きつけられている課題であるといえよう。この小論では特に、英語教育における authenticity の観点から、教室内で教師が果たすべき役割について論じる。

*鳥取大学教育地域科学部 英語教育第1研究室

1 Authenticity をめぐるいくつかの問題

英語教育において authenticity という語は1970年代頃から使われだしたようである。しかしこの類語である real、reality、true などはかなり以前から用いられていた (cf. Brooks, 1960)。これは、教室内という、実際の言語使用の場から離れた場所で語学教育を行うという制約が、強く意識されているからに他ならない。特に EFL と称されるわが国の教育現場などではこの意識は顕著である。そこに、「生きた英語」の必要性が生じてくるのだ (cf. 『英語教育』(1996) Vol. 45 No. 9)。最近では、英語あるいは英語学習をできるだけリアルなものにするために、コーパス言語学の知見を援用しようとする試みも見られる。一例として、能登原(2003)では、「コーパスデータを利用して直接言語データを見ながら意識的に学習する」DDL を提唱し、このような学習法を authenticity と結びつけようという論を展開している。

また、能登原(1996)では、authenticity に関してそれまで出されてきた議論を総括して、以下の四種類にまとめている。

- ① インプットの authenticity
- ② 学習者の心的解釈活動の authenticity
- ③ 言語活動の authenticity
- ④ 社会活動の authenticity

以上の内で①③および④は、概ね、教室の外にある現実における言語材料や言語活動を指す。一方、②についてはそれを主張している一人の Widdowson

(1979) では以下のとおり説明されている。

I am not sure that it is meaningful to talk about authentic language as such at all. I think it is probably better to consider authenticity not as a quality residing in instances of language but as a quality which is bestowed upon them, created by the response of the receiver. Authenticity in this view is a function of the interaction between the reader/hearer and the text which incorporates the intensions of the writer/speaker. We do not recognize authenticity as something there waiting to be noticed, we realize it in the act of interpretation (p. 165).

このように、上記の四つの種類の中で、①③④と②とは対立する関係にあることが理解される。すなわち、新聞記事とか缶詰のラベル、あるいはコーパスに収録されている膨大な量の生の英語用例、あるいは現実の言葉の遣り取りなどが①③④である。一方、②の主張は、現実世界から持ち込んだものをただ生徒に提示さえすれば良いというわけではなく、それを受け取る側によってある心的な解釈が与えられた時にのみ、そこに authenticity が感じられるというものである。同様な主張は、金田 (1992) にも述べられている。

Authentic と言うと、英語そのものの真正さが先ず話題に上る。外国語教育の文献に現れるこの言葉の定義としては「ネイティブ・スピーカーが使う自然な英語」というのがごく一般的である。.....ところが、これらの教材を教室に持ち込むとその途端にその教材の持つ真正さは

「作りごと」になってしまう運命にある。前節に述べたように教室にはその教材を伝えようとする情報を必要とする必然が無いことは自明である。学習者がこれから英国や米国へ出かけることが予定されているならばそのような教材はまさに「学習者の身に関わる」事柄になるが、そのような状況にない場合、教材そのものが如何に真正であろうとも学習者にとっては全く真正でも何でもないということになる。

金田氏はこのように述べたあとで、「authenticity には教材の authenticity に加えて、学習者にとっての authenticity」を考えることの必要性を説いておられる。この学習者にとっての authenticity とは、Widdowson の引用にある “the act of interpretation” と同義である。

2 Authenticity と Stereotype

現実世界で実際に使用されている言語例であっても、それが教室内に持ち込まれるとなぜ「真正でも何でもない」ものになってしまうのかというと、そこにわが国特有の「モノ化」のプロセスが存在しているからである（足立 1994）。このモノ化の影響があるからこそ、「これらの教材を教室に持ち込むとその途端にその教材の持つ真正さは『作りごと』になってしまう運命にある」といえるのである。さらに、このモノ化の背後にあって、そのプロセスを生み出しているのがカタカナを持つ日本語である。わが国には、日本語という、コミュニケーションの観点からは絶対的な地位を独占する言語がある。わが国での日本語の絶対性は、それをあえて「国語」と呼ぶところなどにも反映されている。そしてその有形無形の影響力は、これまでも国語教師

などによって指摘されてきている。

日本語における「国語」という語は、固有名詞として使われており、絶対性が強い。従って、他言語との比較の上に、相対的な特殊性をもった一言語としての「日本語」、さらに「現代日本語」であるという観念が付随していない。……日本人に「日本語」によって本当の言語感覚を身につけさせるためには、まず「国語」という名称を廃し、授業を「日本語」と「文章鑑賞」の二つに分ける必要がある。そうすることによって、日本語を使って話し、考えるという自覚が生まれ、また逆に世界の一言語なのだという感覚も生じて外国語教育にも効果が及ぶものと考えられる（田村 1984）。

このような提案にも何うことができるように、日本語、あるいは国語の影響力は外国語学習にも及んでいる。その負の影響力こそ、まさに金田氏の指摘に見られる *authenticity* の間引きなのである。

客観的に見れば、英語も日本語も生きた言葉であることは説明を要しない。ところが、これまでの研究にも示されているように、言葉の持つ *authenticity* が実感されるためには、学習者側のある心的活動が必要である。さもなければ、言葉がゆがんだ見方をされがちなのである。なぜであろうか。この問題を突き詰めていくと、そこにはより普遍的な人間の認知活動とつながる一つの大きな問題が潜んでいることが予想される。Stereotype の問題である。Stereotype とは以下のように説明される。

Our cultural milieu shapes our world view—our

Weltanschauung—in such a way that reality is thought to be objectively perceived through our own cultural pattern, and a differing perception is seen either false or “strange” and is thus oversimplified. If people recognize and understand differing world views, they will usually adopt a positive and open-minded attitude toward cross-cultural differences. A closed-minded view of such differences often results in the maintenance of a stereotype—an oversimplification and blanket assumption (Brown, 2000:179)

英語をあるがままの姿でとらえることができないのも、学習者が無意識のうちに、日本語を中心とした生活(“our cultural milieu”)に起因する特有の見方から眺めているからに他ならない。すなわち学習者は知らず知らずの内に、異文化の言葉について“an oversimplification and blanket assumption”を抱くようになってきているからであると考えられる。これが、わが国の英語教育において教材の持つ authenticity だけでは十分に効果的ではない認知上の原因である。学習者は、日本で成長していく過程において、日本語からの影響に徐々に浸されるために、いつの間にか言葉についても独自の *Weltanschauung* を抱くようになってしまっている。あるいは、言葉を stereotype にはめ込んでしまっているのだ。だからこそ、“the act of interpretation”であるとか、あるいは「学習にとっての authenticity」の必要性が痛感されることになるわけである。

では、学習者はどのように“the act of interpretation”に従事したり、あるいは「学習者にとっての authenticity」を手に入れることができるの

であろうか。この点について、前掲の Widdowson では、単に “the interaction between the reader/hearer and the text which incorporates the intensions of the writer/speaker” と述べられるだけで、あたかも教材と学習者がそろると、そこに自動的に相互交渉が生起するような記述しかない。一方、金田 (*loc. cit.*)では、多少だが教師の役割も加えられている。

しかし、最も重要な考慮すべきことは「聞く」ことの学習活動が「学習者の身に関わって」行われているかどうかである。学習者が、「聞きたい」ということを聞かせているかどうか、「聞いた」ことで学習者がそれぞれ自分のこととして「行為や感情」を現すことができているかどうか、「学習者間」で、或いは「教師との間で」聞いたことを契機にして、「更に聞きたい」と学習者を鼓舞し、教師も学習者からの反応によって更に「新たな情報の提供や意見の交換」へと進み得るかどうか「聞く」ことの指導の要であると思われる。

上の引用では、学習者にとっての authenticity に関して、教師の役割が論じられている。それによると、教師の役割とは、学習者の要望、反応に応えるというのが主旨である。しかしながら現実的には、教室内で、多種多様な個性、能力を持つ学習者の要望、反応にどのようにして応え行くことが可能なのだろうか。この考え方では、学習者が主で、教師は従である。すなわち、教師は学習者の気まぐれに翻弄されかねない危険性と隣り合わせなのである。

そのような危険性から逃れ、また教師が教師たる真価を発揮させるためには、あくまでも教師が主たる役割を演じることが不可欠である。すなわち、

教材と学習者の間に位置した教師が、まず自分の工夫なり解釈を教材に与え、それにより学習者にとっての *authenticity* を作り出してやることこそ、教室内の教師の機能だといえよう。この作業は、親鳥がいったん餌を自分の口の中で咀嚼してからひな鳥に与える行為にたとえることができよう。その咀嚼の出来不出来こそ、その日の英語授業の出来不出来に直結する問題となるのである。次節では、そのような教師が日常の授業でできる活動の具体例を、主に三つの点から述べてみる。

3 Stage としての教室

授業前の教室は、まだ何も飾り付けのない舞台である。そこに教師が入り、生徒が座る。授業の始まりを告げるチャイムの音は、ドラマの上演開始を告げるベルの音だ。

教師は教科書を開くと、新出単語の導入、本文の範読と授業を進めていく。次に学習者が教師について本文を読み、訳を始める。教師は学習者の訳を聞きながら、気の付いた点をコメントし授業はさらに進む。これが、毎日のように学校で繰り返されている、ごくありふれた授業風景である。では、生身の教師は、このような授業の中でどのように *authenticity* を創り出していくことができるのだろうか。まず、その具体例を述べてみることにする。

(A) Un-stereotype the language

Un-stereotype the language という観点から、前置詞 *on* を例として最初の活動を見てみる。

中学校などで学習される on には以下の用例が見られる。

- (1) on the desk
- (2) on the ground
- (3) on her back

このような使い方を学習した後で、教師は次のような例を使うことができる。

- (4) 'On your mark. Ready, set, go!'

ここでの on は、それまでの学習してきたものと同じく、「ある物体が別の物体の上に接触している」という意味、用法であることは変わりがない。しかし、意志のある人間が、自分の手を線上に置くという一連の動作に対しても同じ前置詞が使われることを示すことにより、on という前置詞に対しするイメージを広げさせる効果があろう。学習者は言葉を学ぶ際に、できるだけ自分の認知構造にとって負担にならないような方法で覚えようとする。実は、これが stereotype の機能でもあるわけだが、そのままでは言葉に対して “blanket assumption” を持ったままで終わりやすい。この例は、そのような stereotype を一時、取り外し(un-stereotype し)、on に対して新しい見方を植え付ける一つのきっかけの例だが、同時にここに学習者が言葉に関する authenticity を感じる機会があるといえよう。また、このような理解を経ることにより、

(5) On the morning of ...

などの用法も理解がさせやすくなるという別のメリットも考えられる。これを単に「特定の日の前には ‘on’ を使う。」と棒暗記させるようなタイプの授業では、言葉に関する authenticity が生まれる道理はない。そこで教師は、教室という与えられた stage を使って、日頃の英語との関わりの中で自らが学び覚えた、そしていつでも授業で使えるように準備してある種類の用例を交えて言葉の多様な面を見せてやる必要があるのだ。生身の教師はこのように、時に un-stereotype the language することにより、授業に authenticity を与えることができるのである。

(B) Asking “How come?”

Asking “How come?” とは、英語の中の語、語句、あるいは文法について、「なぜ」を考えさせる例である。その最も卑近な例は語源に言及するというやり方であろう。語源を使った授業、あるいは市販の教材は珍しいものではないかもしれない。しかし、一般の語源の利用法を見ると、その主たるねらいは未習の語、語句を覚えさせるための方便となっている。一方、ここでは、暗記の効果を上げる手段以外の語源の利用法を考えてみる。例は、最近のテレビ番組で紹介されていたものである。

- (1) bulldozer の語源： 古い時代には、工事現場などでは牛が鋤を引いて土砂の運搬に活躍していた。しかし新しい土木作業用の車両が開発され、牛の出番はなくなった。それで、出番がなくなった牛

(bull) を居眠りさせる (dozer) というところから、この新しい土木作業用の車両は、bulldozer と命名された。

この単語は、大部分の学習者にとっては、中学校で英語を学ぶはるか以前から馴染みのある単語であろう。そのような単語の語源を授業で持ち出すことの意義はどこにあるのだろうか。

その答えとして、John Donne (1624) の有名な一節 “No man is an island, entire of itself; a part of the main; . . .” (in Brown, *ibid.*) になぞらえると、“No word is an island, entire of itself, a part of the main” が上げられよう。どのような語、語句であっても、それらは根無し草のように漂っているわけではない。全ての語はさまざまな関係の中に位置するものである。そのような関係とは、共時的なものもあれば、また通時的なものもある。授業で語源を扱う目的とは、この言葉の持つ通時的な関係を意識させることに他ならない。言葉の背後には長い歴史が横たわっていて、文化の一つの所産なのである。どんなに馴染みのある単語であっても、一皮めくると、その下には膨大な言葉の世界が広がっているのである。あるいは、計り知れないほど深遠な英語文化の氷山の一角が、教科書等に使われている語、語句なのである。このように語源が言葉の authenticity を実感させるためには有効であると思われるのは、それが英語の語、語句は、単に暗記の対象である記号などではないということを確認させることができるからなのである。

Asking “How come?” を起点とした authenticity 追求の方法には、語源を利用するもの以外に、他の方法もあろう。教師によるどのような工夫であれ、そこに共通するのは、対象が文法、音声、文字を問わず、その背後に潜む英語文化に触れさせるという点である。また、英語教師は、日々このよう

な問題意識をもって英語を学び続けて行く必要があるだろう。なぜなら、教室という stage に立った際に教師にとって必要となるのは、そのような英語との接し方を土台とした教材の工夫、解釈だからである。

(C) Shock the students into realization

英語の授業に authenticity を付与する三つ目の方法は、一種のショック療法ともいえる。この例を、今年度、鳥取大学実践科目英語 C (LLでのリスニングの授業。前期と後期。対象は工学部 2 年生。各期の受講生数は、それぞれ約 60 名) で 1 年間実践した経緯を交えて述べる。

この授業では、独自に開発した教材を用いたが、その教材開発と授業設計は word-recycling (Adachi and Wada, 1998) を核とした方法である。簡単に述べると、word-recycling とは、既習の基本語を中心にしてリスニングの授業を組み立てるというものだが、そのメリットは、(1) 既習の基本語は使用頻度が高いために、リスニング能力を確率論的に高める効果がある、(2) 既習の語であるため、学習者への認知的な負担が少ない、(3) 基本語を、休眠状態から活性化された、いつでも使える状態へと変化させることができる、などである。

さて、実際の授業は STEP1 から STEP7 まで順次進めていく組み立てになっている (Adachi and Wada, *ibid.*:112)。Word-recycling は STEP 5 で行われる。実際の教材では、これはブランク問題の形式をとっているものである。授業では、受講生にこのブランク問題をさせる直前に、英文テキストに併記されている和訳にまず注目させる。教材の和訳は、かなり工夫されていて、ごく自然な日本語表現である。この自然さを最大限、利用しようとい

うのがここのねらいである。具体例としては、以下のようなものがある。

- (1) しかし、これは若者の必要や要求にこたえませんでした。
- (2) 現在ラップは「ヒップ・ホップ・カルチャー」の一部ですね。
- (3) この国の黒人が受けている扱いにむしゃくしゃしている人が大勢います。
- (4) これは古代アフリカまでさかのぼります。
- (5) ラップにはこの伝統が脈打っています。

受講生は、上のような和訳、特にそのアンダーラインを施した部分に注目を
するよう指示される。その後しばらく時間をおいて、受講生がどのような内
容を予測すべきか理解した後で、英語の音声を流す。そこで聞く英語が以下
である。

- (1)' But it didn't speak to the needs and the wants of the young,
of the youth.
- (2)' Now the rap is part of the "hip-hop culture," correct?
- (3)' A lot of, it's just sick and tired of the way that black people
are being treated in this country.
- (4)' It goes back to ancient Africa.
- (5)' And rap carries that tradition...

上の英文では、アンダーラインを施した部分が解答になっている。ここで
は、最初に目にした自然な日本語訳が、全て中学生レベルの英語表現であら

わされていることが理解できよう。受講生は、自分たちがこれまでに習い暗記してきた語、語句がいかに自然な表現として使われていることを学ぶ。その際、同じく自然な日本語訳を経由することにより、その新鮮な驚きが倍増すると考えられる。これが前述した word-recycling のもう一つの効用である。Word-recycling は、学習者の頭の中に眠っている知識を活性化させることを目的としているが、同時にそれは学習者に適度なショックを与え、そうすることにより言葉の authenticity を感じさせる効果も持つのである。これが、今年度1年間をとおして試行した、authenticity を模索した授業例である。

4 まとめ

教室は、教師にとって stage である。一見しただけでは、授業中の英語の教師は、教科書に書いてある語、語句、文を、ただ繰り返し読み、訳しているように見えるかもしれない。しかし、どのような言葉であれ、いったん教師の口をついて出る言葉は、すでに教師の中で様々な解釈を受け、変容している。それは一つの単語の発音、一つの文のイントネーションとなってあらわれる。さらにまた、一つの単語を見ただけで、教師は別の単語であるとか、過去に遭遇した文とか、あるいはその文が発話された場面を連想するかもしれない。こういったもの全てが、教師が教室という stage で authenticity を創出する道具立てとなるのだ。道具は多いほどよい。しかし、最終的に問題となるのは、飾りのない stage を徐々に本物の世界へと変えていく教師の技術であろう。その意味で、authenticity を作り出せる技術とは、わが国の英語教育の中で、最も必要かつ大切な教育技術であると

いえる。その特別の地位を表すために、この技術を特に教授法とよぶことは可能であろう。

参考文献

- 足立 和美 『二重構造の論理』富士書店、1994.
- 金田 道和 「これからのリスニング指導—The Authenticity We Need—」
『中国地区英語教育学会研究紀要』 No. 22, 1992: 289-292.
- 能登原祥之 「教材の authenticity の問題」柳 善和、他「リスニング」
『英語教育』 Vol. 45, No. 7, 1996:70-72, 大修館書店.
- 能登原祥之 「Data-driven Learning の Eメールライティング活動への導
入法」第34回中国地区英語教育学会発表資料、2003年6月21
日、広島大学教育学部.
- 田村 秀幸 「投書」『毎日新聞』1984年2月10日.
『英語教育』「特集 生きた英語を教えるために」 Vol. 45, No.9, 1996, 大
修館書店.
- 『英語教育』「インターネットと英語教育」 Vol. 45, No.10, 1996, 大修館書
店.
- Brooks, Nelson. *Language and Language Learning*. 2nd ed. Harcourt,
Brace & World, Inc. 1960.
- Brown, H. Douglas. *Principles of Language Learning and Teaching*. 4th
ed. Longman, 2000.
- Widdowson, H.G. *Explorations in Applied Linguistics*. Oxford University
Press, 1979.

Adachi, K. and A. Wada. "Bridging Gaps in Teaching Listening for Integrated Control in English." 『鳥取大学教育学部研究報告』 (人文・社会科学) 第49巻、第1号、1998:103-112.